

4 もう一つの逃避行

—宇都イネのライフヒストリー—

聞き書き：資料収集調査員 網島 延明



三互会の旅行先で
撮影(1998年頃)

宇都イネ(うと いね)の略歴

大正 13(1924)年	宮崎県に生まれる
	11歳で両親を亡くし、母方の祖父母に引き取られる
昭和 14(1939)年	15歳の時1人で渡満、叔父さんの家で暮らす
昭和 20(1945)年	終戦時に叔父さんの家から追い出された後、中国人に助けられて結婚 (ハルピン在住)
昭和 32(1957)年	一時帰国
昭和 55(1980)年	単身で永住帰国
	その後、中国にいる子どもたちをつぎつぎに呼び寄せる
	三互会 ^{さんごかい} で婦人部長を勤める
現在	東京都足立区 ^{あだち} で一人暮らし

1. 故郷での少女時代

私は大正 13(1924)年に九州の宮崎県で生まれました。父は薩摩藩の武士の子どもでした。生まれてもすぐには籍を入れてもらえず、1年遅れて、大正 14年 3月に戸籍に入れてもらいました。私が 10歳の時、父が病死し、11歳の時には母も死んでしまいました。当時 2人の弟はそれぞれ 10歳と 3歳でした。両親を亡くした私たちは米 3俵、馬 1頭と引き換えに母方の祖父に引き取られました。

祖父の家では長男夫婦やその子どもたちと障害をもつおばさんがいました。私たち姉弟 3人

を合わせて、祖父の家では子どもだけで8人になりました。私は一番年上で、子どもなりに自分の立場をよく分かっていました。親がいないので自分が2人の弟の面倒を見ないといけないということも。学校から帰ると、おじさんの子どもをおんぶしたり、おばさんの仕事を手伝ったり、家事などなんでもしました。とりわけ13人家族用の水運びが大きな問題でした。今のような水道がないので、飲み水や風呂用水を汲む仕事は私1人が天秤棒をかついでやっていました。気候が暖かいので、年2回耕作していましたが、田植機があるはずもなく、田植え、草取り、お茶摘み、桑摘み、あらゆる農家の仕事を大人並みにしていました。よく働いたせいでしょうか、おばさんたちに怒られたことはあまりなかったです。

食べものというのは、収穫しても、それほどおいしいものは食べられませんでした。麦と粟の入ったご飯、それにたくさんの野菜、祖母手作りのお漬物といったものでした。居候でも、お腹いっぱい食べられたので、親がいなくて悲しいとは思いませんでした。

学校での成績はいつも1、2を争っていました。朗読が得意で、学校の先生にもよく知られ、卒業時にはクラスの総代として、卒業証書を受け取りました。しかしおじさんの家は子どもが多く、私をこれ以上学校に行かせるつもりはありませんでした。小学校の先生はこのままだと非常にもったいないと思ったのでしょうか、山道を歩いて、家を訪ねて来て、尋常小学校の高等科に出してくれないかと祖父に相談しました。私は風呂を沸かしながら聞いていましたが、祖父は高等科2年間の勉強を許してはくれませんでした。祖母も何も言いませんでした。何年か過ぎると、祖父たちも大変だったでしょうし、やむをえない決断だったのだろうと思うようになり、少しも恨むことはありませんでした。一方で、もし自分の親がいれば、きっと学校に行かせてくれたらろうなど、はじめて親が居ればと感じました。

それから、東京から来たお医者さんが地元で開業するにあたって、私は学校の先生だったお医者さんの娘の紹介で、子守などの家事手伝いとして雇われました。先生は私に親切で、高等科の教科書を用意し、読ませてくれました。

2. 渡満

時代は満洲事変が起こった後でした。満鉄に勤めていた父方の3番目のおじさんから手紙が届きました。私のことを、頭がよくてよく働かし、満洲に来れば、きっとお金を稼げるよと褒め、渡満を薦めてくれました。あの時は、満洲とはどこにありどうやって行けるかなどもわからず、ただ、仕事が見つかるとのことだったので、たとえ1円でも5円でも稼いで、世話してくれた祖父のところにお礼をしたい、それに2人の弟がよりいい生活できるようにしたい、ということだけで頭いっぱいでした。それでお医者さんのところをやめて、満洲に行こうと決意しました。

昭和 14(1939)年 7 月、15 歳だった私はたった 1 人で満洲に渡りました。当時関門鉄道ができていなかったのので、関門連絡船で門司から下関へ行き、それから関釜連絡船で朝鮮に上陸しました。朝鮮で船を下りると、列車が横付けになっていたのので列車に乗り込んで中国へ向かいました。奉天(現在の瀋陽)で「宇都イネさんはいますか」と列車の放送がありました。でも、怖くて「はい」と答えられませんでした。満鉄の警護隊をやっていたおじさんは私がこの列車に乗っていることを知っていたので、息子を連れて前からうしろまで列車の中を探して私を見つけてくれました。

奉天からの汽車はひたすら北へと走りました。広い草原が広がる中、所々土でできた小屋のような建物がありました。そして、終着駅であるハルピンに着き、ようやく 4 泊 5 日の旅が終わりました。

3. 満洲での生活

おばさんの虐待

3 番目のおじさんの奥さんはいわゆる大陸の花嫁で、韓国から嫁いだ朝鮮人の方でした。非常にきれいな方で、格好も小綺麗にしていました。日本語はしゃべれるけど、文字は読めませんでした。それからの人生で、後の敗戦時の避難の苦勞よりも、このおばさんにいじめられた苦勞のほうが大きくなるとは夢にも思いませんでした。

ハルピンに着いた 4、5 日あとに、年齢相応の小学校高等科卒と書いた履歴書をもって行き、タイピストの学校へ入学することになりました。3 ヶ月で、タイプ学校を卒業し、その後タイピストとしていろんな会社で仕事をしました。

タイプ学校に通っていたとき、おじさんが学校の先生と知り合いだったので、「少女倶楽部」などの雑誌を送ってくれました、それで字の勉強などもしました。吉屋信子、菊池寛の小説も熟読しました。本を読むのを一番の楽しみにしていました。終戦まで 8 年間働きました。おじさんの家に行った最初のころは、おじさんの子どもは 2 人でしたが、さらに 3 人の子どもが生まれていました。

はじめの頃おばさんはやさしくしてくれましたが、3 ヶ月過ぎた頃から、徐々に本心が出始めました。おじさんが満洲に行った頃、まだ日本人が少なく、まして結婚できるような若い娘さんはもっと少なかったです。ですから、朝鮮人と結婚する日本人も決して少なくありませんでした。そんな嫁さんの中でも、おばさんは和服の着付けも、日本語も上手なほうでした。私は会社で働いているときも、おばさんに家事手伝いをさせられるため、度々会社を休みました。月給制でしたので休んでも給料は変わりませんでしたが、会社に申し訳なくて結局辞めざるをえなくなりました。

ちょうどその頃、「大東亜建設」^{だいたうあけんせつ}、「五族協和」^{ごぞくきょうわ}をスローガンに「満蒙開拓団」^{まんもうかいたくだん}がたくさん満洲の地へ送り込まれました。ハルピンの景気がよかったのを幸いに、探せば仕事がいくらでもありました。結局いろんなところで転々と仕事をしました。その後、映画館の案内係もしました。おばさんたちはただで映画を見られるから、喜んでいました。

自分が勤めて、稼いだお金はおばさんに1銭も残らず全部取り上げられました。日本の祖父へ1円でも仕送りしたいと思ったのは単なる夢に過ぎませんでした。着る物はそれなりに買ってくれましたが、それは自分の親戚の子だから、みすばらしい格好をしていては恥ずかしい、という理由でした。私の身の上のことには一切関心持たず、稼いだお金を全部取り上げられることは本当にくやしかったです。

おじさんのお仕事はよかったので、おばさんは奥さんとして、家でも外でも威張っていました。私は本が好きでしたが、そのことで本を読めないおばさんの反感を買いました。おばさんは、私が本を読むことが憎らしくてたまらなかつたようです。まだ子どもで好奇心旺盛だった私は、隣の友達から本を4、5冊借りてきて、楽しみにして読もうとしたわけです。そうしたら、おばさんに見つかって、「お前は本が好きだろう、読みなさい」といって、私の両手を後ろに縛って、本を机の上に置いて、「読め」と言いました。本当の親はこんなことをするのでしょうか。子どもが本を読むといたら、喜ぶでしょう。これくらいのいじめはほんの序の口にすぎませんでした。

私は朝早く起きてご飯を炊いて、お弁当を作ってから、働きに行きました。仕事から帰ったらお洗濯が待っていて、1日たまった洋服を洗濯しました。乾いたものはアイロンがけしなくてなりませんでした。勤めるだけならまだ楽ですが、外でも、家に帰ってもとにかく働くしかありませんでした。女中どころではなく、奴隷とおなじ扱いをされました。おばさんは奥様という感じで、何もしていませんでした。おばさんが白と言ったら白、黒と言ったら黒という感じでした。

おじさんは仕事で、あまり家にいなくて、私がいじめを受けることをあまり知らなかつたです。おじさんがたまに帰って来て、故郷の日本のことをあれこれ尋ねたりすると、おばさんの機嫌が悪くなりました。面白くないわけです。

また、夜遅くまで仕事をしていたにもかかわらず、朝5時に起きて、残っている家事をしなければなりませんでした。ある日、朝起きてアイロンをかけていると、あまりにも寝不足だったので、かけている最中に寝てしまいました。あわや火事になるところでした。その後叩かれたことはいうまでもありません。

働き詰めで、私はとうとう倒れてしまいました。高い熱を出して、体がガタガタ震えています。

した。横にいたおばさんはうるさく感じたのでしょうか、私の口に指を入れて、うめく声を止めようとしてました。

おばさんの家から何度も逃げようとしてましたが、おじさんが警察ですので、すぐ見つかって、連れ戻されました。またあの頃は配給制だったので、逃げたところで、戸籍証明がなかったらご飯はたべられません。連れ戻された後、ますますおばさんのいじめはエスカレートしていきました。

弟も満洲に

私がハルピンへ行って2年目におじさん夫婦が里帰りして、今度は私の下の弟を満洲に連れて来ました。その後、上の弟も満洲に呼び寄せられました。弟は満鉄へ入社して、宿舎に入り、技術の勉強をしていましたが、時折遊びに来ました。中国に「半工半読」という言葉があるように、勉強をしながら月給をもらうという仕事をしていました。おばさんはあの子だけは可愛がっていました。おばさんは頭が古かったのです。男だけを大事にするのです。自分も女なのに。なぜか「男尊女卑」観念は非常に強かったです。日本人より余程強かったです。

弟はやっと2年間の勉強が終わり、会社から団体で松花江^{しょうかこう}に訓練に行った時に、松花江で溺死しました。享年20歳でした。弟の死で、会社から当時2千円の大金が下りましたが、おばさんは全部自分のものにしました。これは2回目の里帰りの時、おばさんの口からうっかり漏れてみんなに知られることになりました。

4. 逃避行

終戦の混乱の中、多くの人が中国から日本へと逃げましたが、私はおばさんの家から逃げるのに必死でした。

昭和20(1945)年8月15日、終戦の玉音放送で「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」と聞き、日本は戦争に負けたなと思いました。それでもおばさんが「おじさんに電話してはつきり聞きなさい」と言ったので確認の電話をするために大通りに出ました。街の一角に日本人の畳屋さんがありました。そこで電話を借りて、おじさんに電話をかけると、ただならない声で、「家の中でじっとしている」と言われました。日本が確かに負けたんだとわかりました。電話を終えて帰っていると、国民党の青天白日旗が満人の家のいたるところに翻っていて、びっくりしました。帰ったらまたびっくりしました。おばさんが自分のチマチョゴリを取り出して、壁のハンガーにかけていたのです。おばさんは逃げる準備をしていました。

おじさんは警察官だった関係で、ソ連兵に捕まってシベリアで抑留されました。その後、私

はおばさんと生活していました。

ある日、おばさんは私の下の弟と買い物に出かけました。私は膝におできができて足がぱんぱんに腫れていたもので、留守番をしておばさんの子どもの世話をしているように命じられました。私なりに子どもを寝かせて、部屋を片付けようと思って横になっていたら、毎日の寝不足と疲れで、いつのまにか、寝てしまいました。運が悪いことに、おばさんがその時帰って来ました。私が寝ているのをみて、もう大変です。「人が買い物している間、お前は呑気に昼寝しているのか」とがみがみと怒鳴りながら、座敷箒（竹の柄のついた長い箒）で、私を思い切り叩きました。竹の柄もばらばらになりました。私はただひたすら「ごめんなさい、ごめんなさい」と謝りました。おばさんの長男が「お姉ちゃんを許してください」と懇願してくれましたが、それも振り払って私の頭、顔、手、足と所構わず叩くのをやめませんでした。私の体もボロボロでした。ついに家から出て行けと家の外に出されました。

その頃、街にはたくさんの日本人が死んでいました。死んでしまえば、どんなに楽だろうと思いつつ、家からできるだけ遠くへ走って逃げました。友達のところを訪ねましたが、おばさんが探しにくるのを恐れて少し物をもらおうと早々に別れました。薬を飲んで死ぬか川に入って死ぬかと途方に暮れていました。亡き両親がいつまでも見守ってくれているという祖母の言葉を思い出しました。涙も枯れ、心のなかでこの世に本当の神様や仏様はいるのかと思いつつ、壊れかかった建物の中で何日も過ごしました。

幸いにも、どこの国にもいい人が居ます。うろうろしている間に、日本語の分かる中国人に話をかけられ、「あなたに関する話を聞きました。あなたが1人でうろうろしていても、すぐ寒くなるでしょう。病気になったら死んでしまうよ」、「世話をするから、家に来なさい」と親切に言われました。そのとき、それがどういう意味なのかはわかっていました。もし、おばさんに捕まったら、殺されるに違いありません。私は自分が死んだと思って、その人のお世話になることを決意しました。

じつは私を世話しようとする人が2人いました。1人は一人身で、もう1人は家族が多く、母親と兄、妹と3人の甥っ子がいました。私は家族の多いほうを選びました。どうしてかという、おばさんに叩かれて心の病気、いわゆるトラウマになっていたようです。家族全員が全員で私を叩くことはないだろうという幼稚な考え方で、大家族のほうを選びました。その男性は自分ののちの主人となりました。

当時、弁護士だった方のお嬢さんと付き合いがありました。そのお母さんから「あなたは中国人と一緒にあったでしょう、日本人はだめだと言われないようにがんばりなさい」とはっぱをかけられました。その言葉は私の心に染み込みました。中国式のご飯炊きも、おかずの作りかたも知らなくて、いろいろとゼロから学びました。

主人は日本の明治製菓^{めいじせいこ}に勤めていました。日本語を勉強したこともあり、日本びいきでした。家族は、貧乏は貧乏でしたが、みんなは割と私にやさしかったです。近所に大学生がおり、日本語と中国語の本をくれました。暇をみて、日本語を見ながら、対訳の中国語を勉強しました。

翌年の春ころ、日本人の引揚げが始まったようですが、日本人の誰にも会えず、近所の中国人も教えてくれませんでした。最後の列車が出る日がわかり、隠れて駅まで行った時にはもう間に合いませんでした。私と同じく間に合わず、残された同胞の日本人もそこで泣き崩れていました。私は泊まる場所もないので、それまで世話になった家に帰りました。途中まで主人が迎えに来ていました。

これから30年以上になる山あり谷ありの中国人の妻としての生活が始まりました。

家族でいじめはありませんでしたが、なにもできない私に意地悪なことはありました。夫の妹は私のことを「姉」とは絶対言わなかったです。私の長男に「この子はお母さんのいない子みたいだね」と意地悪なことを言ったりしました。それでもおばさんに叩かれるよりましでした（笑）。少なくとも叩かれることはなかったですから。

結婚してしばらくは子どもができなくて、姑の機嫌が悪かったです。はやく孫の顔を見たかったのでしょう。結婚して3年目(1948年)で長女が生まれました。1949年、長男が生まれ。その後次女、三女が相次いで生まれました。随分子どもができない時期が長くて、姑に怒られましたけど、子どもができると喜んで、卵を持って見舞いに来てくれました。

5. 子どもたち

愛情がなくても、子どもができます。男1人と女3人の子どもができました。私の子どもは日本人の母を持つことで、学校でよく「小日本鬼子^{シャオルエイベスグイズ}」(日本人の鬼のチビ)呼ばわりされていじめられました。でも子どもたちは家に帰っても何も話しませんでした。母に話せば、母が苦しむという母親思いだったからと思います。幸いにも上の2人の子どもは学校での成績が1、2を争うくらいすごくよかったです。それが心の慰めになっていました。

文化大革命^{ぶんかたいかくめい}の時に「海外関係」があるがゆえに、中央からの命令で長男が^{りゅうこう}竜江というところに「下放^{かほう}」されました。そこは国境に近い農場でした。農業をしてロシアとの国境を守るためだったのです。母親が日本人なので、政治とは無関係の職業に就こうと息子は獣医を勉強する希望を出しました。すると、母親が日本籍だから、希望は却下されました。私は友人に相談して、公安局に中国籍に直そうと聞きに行きました。しかし、中国籍に直しても、日本人の子どもと見なされるとのことで、諦めました。そのことを長女が弟に手紙で知らせて

きたのです。息子からは、「ぼくのために日本国籍を変えないでください。いつか後悔することがあるから」と書いてきてくれました。

長女も好きな人ができて、よく家に来て一緒に仲良く勉強していました。その人も成績が良くお互いに気が合っていたようです。成績が優秀で、学校から選ばれて航空学校へ進学して、あっという間に教官になりました。それまで長女と文通していたのですが、教官になったとたん、交際を止めさせられました、理由は「母親が日本人だから」です。

この子らにはなんの罪もありません、しかし、母親としてしてあげられることは何もなくただ悔し涙を流すしかありませんでした。

6. 帰国

私は2回ほど一時帰郷をしました。昭和32年、33歳の時に、長男と次女を連れて一時帰国しました。戦時中の遺骨を取りに来たという興安丸こうあんまるに乗って長崎に帰りました。満洲に渡ってから19年ぶりの帰郷です。おじさんとおばさんが舞鶴港まいづるに迎えに来てくれました。空港の上空でヘリコプターが飛んでいて、「皆さん、ご苦労さま、お帰りなさい」という放送を聞きながら、近づく日本の風景を見て、思わず胸が熱くなりました。



一時帰国時の証明写真
(1957年)

おじさんは役場に勤めていました。(日本の)生活は以前よりよくなり、長粒米で炊いたご飯でしたが、それでもおいしく感じました。

その時、中国でいじめられたあのおばさんが現れました。どこまでも意地悪なおばさんでした。中国から引き揚げてきた私の弟は自衛隊に勤めていましたが、そのおばさんは弟に電報を打っていました。祖母が病気だからすぐ帰ってこいという嘘の内容です。私が金持ちと結婚して、きっとお金をいっぱい持って来てくれたらと思う、弟に私のお金を取りに行かせようと企んでいたのです。でも、弟は最後に言ってくれました、「お姉さんは中国に残ってよかったね。おばさんと一緒だったら、一生おばさんにいじめられて、おばさんが行けというところに嫁に行かされたら。それこそ、宮崎から一歩も出られなかつたら。でも、お姉さんは今いいじゃないか、東京だ、上海しゃんはいだ、北京ぺきんだ、ハルピンだ、いろんなどを渡り歩いているじゃない」と。私も、自分は苦労したけれど、それでもよかったなと思っています。

短期滞在とはいえ、石川県の友人に勧められて、石川県のあるホテルで電話交換手として、仕事をしました。日本には聞いたこともない横文字がずらりとあって、苦労しました。例えば、「フロント」「ショートホープ」(タバコ)、「モーニングコール」などです。しかし、この

時の勉強のおかげで、のちに永住帰国した時は大分楽になりました。

昭和 21 年には帰国に間に合わずにいましたが、その後、帰国するかしまいか、いろいろと悩みました。

思えば、幼くして両親を無くし、2人の弟を守る苦勞をしました。自分に子どもができて、日本へ帰国する気持ちは一時も消えていませんでした。自分の子どもを連れてどこに帰ればいいか、もし連れて帰れば、子どもを可愛がっていた主人は悲しむことでしょう。また自分の血を分け合った子どもを置いて帰ることもできません。悩めば悩むほどどうすればいいかますます途方に暮れました。私1人が涙を吞んで我慢すればいいのだと自分を慰めて、日本に帰国することを諦めていました。

望郷の念を抱き、やっと 1972(昭和 47)年、田中首相の訪中で、実現した日中国交回復を迎えました。その瞬間はすごくうれしかったです。あの時はテレビがなくて、ニュース映画を何回も何回も見に行きました。日章旗(日の丸)が中国の空に上がったでしょう、それをみて、涙が止まりませんでした。これでよかったと胸をなでおろしました。

日中国交回復してまもなく、下放された子どもは農場から戻り、大きな国営農場に勤めるようになりました。次女は専門学校へ入学し、三女は電力会社のメーターを製造する会社へ入社しました。

それから、日本へ帰国する手続きは驚くほど早くなりました。手続きして1ヶ月ほどで日本へ帰れるようになりました。あの時に感激した気持ちは今でも忘れません。

1973(昭和 48)年頃、公安局から呼び出しがありました。希望すれば、日本に帰国できるという日本政府の方針説明会でした。当時参加した人数は 100 人以上でした。中国に余儀なく残された同じ運命の人は私だけではないことを知り、ちょっと安堵しました。

2回目の帰国は 1980(昭和 55)年 3 月 6 日でした。子どもたちは大きくなり、気がかりも少なくなりました。主人には日本に永住帰国するとは言わず、一時里帰りして、また中国に戻るよと言って1人で日本に帰国を決意しました。30年も連絡がないと、本当は戸籍が抹消されるはずでしたが、田舎だからなのか、偶然にもそれは抹消されずに残っていました。戸籍があったから、戸籍謄本をとって、日本に住むようになりました、日本人ですから。

主人は持病で、子どもが世話していました。末っ子の娘が私のことを心配して、私を訪ねに日本に来ました。その子が日本に来て数十日後、主人の病気は悪化し、危篤との連絡があったので子どもを日本に残し、私1人で中国に戻りました。すると、主人は元気になりました。

娘1人を日本に残していることを理由に、その後私は再び日本に帰って来ました。家族全員で日本に行くとは、言い出せませんでした。大家族ですし、日本政府は一時帰国する人には都営住宅を提供してくれません。アパート住まいで、どうやって日本で生活すればいいか、という問題もありました。

三互会の方からも言われました。中国へ戻り、一時帰国ではなく、永住帰国という手続きをして日本に帰国すれば、国費で帰れるし、また、住むところももらえるという話でした。しかし、当時、私は働いていました。中国に戻って、さらに何年もかかって、手続きをすることを考えると、気が遠くなるばかり、そのまま日本に留まることにしました。子どもには都営住宅への入居を申請しなさいと薦められました、しかし、私は一時帰国という資格で日本に戻って来たので、引揚証明書は持っていませんでした。

日本の厚生省は、同じ自費帰国でも昭和56年6月5日以降の帰国の人には引揚証明書を出しました。それ以前は発行してくれませんでした。引揚証明書があるのとないのとでは、子どもの就職にも影響があります。私は、厚生省に引揚証明書を取りに行きましたが、自費帰国が理由で発行してもえられませんでした。

私自身の考えでは、自分のお金で日本に帰って来たことは、褒められることに値するのに、なぜ自費帰国ということで不当な扱いを受けるのでしょうか。自費帰国者は自分で帰って来たのだから、日本政府が面倒をみる類に入っていないということでしょうか。

7. 家族を日本へ

主人が亡くなる時、主人の妹から電報がありました。私に対し、なぜ帰ってこないのかという内容でした。一応ごまかしましたが、なにせ1度帰ったのですし、主人が亡くなったあとに帰っても、どうにもならないと思いました。働いて主人にだいぶ送金し、いろいろと尽くしたと思います。家の子どもたちも母親ががんばったと言ってくれました。主人が亡くなってから、中国にいる子どもたちはなぜ日本に行かないのか、行けない理由でもあるのかなど、変な噂が立てられました。逆に中国にしばらくなり、それで子供家族全員が日本へ来る手続きをするようにしました。

子どもたちは、それぞれ成人していました。日本帰国後2年間ほど生活保護をうけ、日本語を勉強して、わりと早く日本社会に溶け込みました。三互会での初のスピーチコンテストに長男、次女が出場しました、そのコンテスト風景がNHKにも放送されました。

8. 現在

現在、子どもと孫も合わせて15人の家族が、それほど遠くないところに住んでいますし、日曜などには子どもたちが来ます。

私は社会福祉事務所に通訳として登録しています。残留孤児訪日調査時にボランティア通訳をしたり、23区内で通訳が必要なときにはどこにでも行きました。

三互会で婦人部長を務めておりますが、料理教室でギョウザ作りを教えたりしています。それから、会長が言うように引き揚げてきた皆さんは人一倍苦労したので、月1回は会のところで集まって、旅行をしたり、おしゃべりしたりして交流をはかっています。こうしてできた仲間は親戚よりも心強いです。

今年で78歳ですが、元気のよさは気で持っていると思いますね。思えば、おばさんにいじめられたり、食べ物がなかった時代もありましたが、今は一番幸せだと思っています。誰にも気兼ねしないし、部屋は小さいけど、一応一国一城の主、贅沢さえしなければ、自由な生活を送られますし。これから戦争が起きなければ、もっと幸せです。子どもたちには、私たちのような体験をしてほしくないです。国会で自衛隊派遣の論議をしているようですが、本当に世界平和を祈念して、これからの世界をよくしてもらいたいです。

今、一番の楽しみは、昔の友人に絵手紙を出したり、お互い話せる時や楽しめる時に友人に会って、話して、目いっぱい楽しむことです。

まだ、中国の奥地には残留婦人の方々が残って居られるようですが、1日もはやく本人の希望に沿って、この日本の地を踏んでもらいたいと思います。



聞き書きを終えて

私の祖母は開拓団の一員として旧満洲に赴いた。一方、宇都さんは満洲に働く叔父さんのついで大都市に渡っていった。だが、祖母と同じく宇都さんも「中国残留婦人」としての運命をたどっている。このためか、聞き取りは順調に進み、実の祖母と孫が話すほどにうち解けあった。忌憚なく話を聞かせてくれた宇都さんに感謝したい。

一見、宇都さんのケースは、開拓団として中国へ送り込まれた人たちとは違って見える。だが、開拓団との違いを通して、見え隠れする時代背景がむしろくっきりと浮かび上がってくる。どちらにしても、行き詰まった日本社会から旧満洲に新たな生存の道を求めて渡満したことにおいては大同小異だということだ。そして、こうした旧満洲へ向けた動きは、当時の日本の社会的、経済的状況の劣悪な事情を如実に物語っているのだ。こうした時代を背景に、宇都さんは、無数の日本人とともに翻弄され続けてきた。それを裏付けるように、宇都さんは一人ぼっちで逃避行の

途中、何度も死を考えたという。そういう体験から、「私たちのような経験を子どもたちにはしてほしくない」という実感のこもったことばは重い。逆にそんな過酷な時代を生き抜いた宇都さんの精神的な強さにも圧倒されてしまう。

宇都さんは小さいころから非常に勤勉だった上、向上心も人一倍旺盛だった。勉強もよくできただけに、勉強を続ける環境に恵まれなかったのは非常に悔まれることだった。その悔しさは宇都さんがそういうくだりを話すときの表情から容易に読み取ることができる。

本インタビューの後も、何度か宇都さん宅を訪れた。そして、行く度に新しい発見があった。帰国して間もない頃の自分の子どもが日本語コンクールで賞をもらった時の写真、そして、最近孫が優秀賞を獲得したスピーチコンテストのビデオも見せてくれた。宇都さん自身が生きること追われていて、言いたいことがあっても誰にも言えなかったが、それが自分の子どもや孫が次々と自分の代わりに果たしてくれたといわんばかりの誇らしげな表情に私も胸が熱くなった。

人は苦勞した分、人に優しくできるかもしれない。

宇都さんは中国帰国者のために、要望があれば、どこにでも駆けつけ、ボランティア通訳したり、いろいろと相談に乗ったりした。

「今は幸せだ」と穏やか表情を見せる宇都さんは、何かを求めようとはしていない。しかし、だからこそ、我々はこのような歴史を風化させてはいけないのではないだろうか、と強く思った。

(つなしま のぶあき)